

山梨県北杜市明野町上神取
諏訪原遺跡発掘調査概報
2007年度



2007.12

昭和女子大学人間文化学部
歴史文化学科

例　　言

1. 本書は、山梨県北杜市明野町上神坂1558-1に所在する諏訪原遺跡の2007年度発掘調査概報である。
 2. 発掘調査は、2007年8月6日から17日まで実施した。
 3. 発掘調査は昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科が主体となり、山梨県教育委員会・北杜市教育委員会の指導のもと、昭和女子大学大学院生・学部学生が参加し実施された。
 4. 発掘調査は、昭和女子大学大学院生活機構研究科教授 山本輝久・同人間文化学部歴史文化学科准教授 小泉玲子が担当した。
 5. 発掘調査は、文部科学省による「平成19年度私立大学経常費補助金特別補助」にかかる「教育・学習方法等改善支援」に申請し、採択された研究課題「縄文時代における環状集落址形成過程の研究」(申請者 山本輝久)の補助金により実施された。
 6. 諏訪原遺跡の発掘調査は今後とも、毎年、夏季休暇期間を利用して継続的に実施する予定である。
 7. 発掘調査により発見された遺物は、現在、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科において保管中であるが、正式な発掘調査報告書が刊行されたあと、北杜市教育委員会に返還する予定である。
 8. 本調査概要報告書は院生・学部生の協力をえて、山本輝久がとりまとめた。
 9. 発掘調査にあたっては、山梨県教育委員会・北杜市教育委員会のご協力をえたほか、下記の方々からご指導いただいた。あつく感謝したい。
- 佐野 陸・雨宮正樹(北杜市教育委員会)、植片学(山梨県立博物館)、横月未来、小島秀影(若狭三方郷文博物館)、中島将太(杉並区教育委員会)

目　　次

1. 調査経緯	1
2. 遺跡の位置	2
3. 調査経過	4
4. 発見遺構と遺物	6
5. まとめ	15

挿図目次

図1 遺跡の位置図	2
図2 諏訪原遺跡における既往の調査地区と今回の調査地区位置図	3
図3 調査地区全体図	5
図4 C-6グリッド 平・断面図	7
図5 C-7グリッド 平・断面図	11
図6 B-6グリッド 平・断面図	12

1. 調査経緯

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科では、考古学を専攻希望する学生は毎年おり、また、大学院への進学率も高い。考古学では、遺跡の発掘という野外調査を通じて研究が不可欠である。本学科では、実習科目として、「考古学実習」を開講しているが、この科目は、室内での遺物整理作業の訓練の場として位置づけている。したがって、別に、野外での遺跡発掘調査実習の必要性があることから、これまで、1999(平成11)年より2004(平成16)年にかけて、6次にわたり神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡の発掘調査を実施してきた。その後、土地所有者の耕作の都合で継続的な調査が困難になったため、2005(平成17)年からは、山梨県明野村(現・北杜市)に所在する縄文時代中期の集落遺跡である梅之木遺跡の調査を開始した。

この遺跡の調査を実施するに至った経緯は、2004(平成16)年度から、梅之木遺跡の調査指導委員会のメンバーに山本輝久が加わっていたことから、北杜市教育委員会にお願いして、夏季休暇を利用して発掘調査に参加することになったものである。調査にあたって、文科省の「平成17年度大学教育高度化推進特別補助」の内の補助項目「教育・学習方法の改善」に、「縄文時代における標準集落跡形成過程の研究」(申請者 山本輝久)と題する課題で申請したところ、採択されたので、その補助金を調査費用にあてることとした。この補助金申請は4箇年であり、平成20年度まで継続して採択される予定である。

梅之木遺跡の調査は、2005(平成17)年と2006(平成18)年の8月の両度にわたって実施したが、北杜市教育委員会による保存に向けた現地での遺跡確認調査が、2006(平成18)年度に終了したのに伴い、新たに調査する遺跡の候補地を北杜市教育委員会にお願いしていたところ、幸い、これまで個人住宅建設や桑抜根による農地転用に伴う関係で調査が実施され、大規模な縄文中期環状集落址の存在が知られていた、明野町上神取に所在する諏訪原遺跡に調査可能な箇所があるとの連絡をいただいた。

調査の対象地は、諏訪原遺跡が所在する上神取集落内の上神取1558-1番地(土地所有者 村田勝海)の約700m²である。この調査対象地は、かつては養蚕のための桑畠であったが、現在は桑栽培は放棄され雑草地となっていた。のことから今後、毎年継続的な調査を実施するうえで、きわめて適地であると判断された。また、調査予定地の東側に隣接して北杜市(旧・明野村)教育委員会が調査を実施し、多数の竪穴住居址群が検出されていることから、この調査対象地にも確実に竪穴住居址が存在することが予測された。こうして、北杜市教育委員会の指導のもと、土地所有者である村田勝海氏の承諾をえて発掘調査に至ったものである。



写真1 調査地区遠景① 発掘開始前



写真2 遺跡遠景② 発掘開始後 塩川右岸より

2. 遺跡の位置

遺跡は、山梨県の北方に位置し、山梨県北杜市明野町(旧・北巨摩郡明野村)上神取1558-1番地に所在する(図1)。標高約550m、塙川左岸の河岸段丘面に広がる遺跡で、東側には標高1700mを越す茅ヶ岳・金ヶ岳の雄大な山麓が広がり、北西には八ヶ岳山麓、南西方向には、南アルプスの山々が望まれる風光明媚な場所に位置している。これまでの調査結果によると、「茅ヶ岳山麓でも最大級の規模を誇る」とされ、「遺跡の広がりは2万m²以上におよび、100軒を優に超える住居址が埋蔵されていると考えられる」(佐野 1996)、縄文時代中期の大規模な拠点的環状集落跡である。

収益業不振により桑の栽培が放棄され、それに変わって、畑地への転化や宅地化が進みつつあり、そうした状況の中、桑の抜根による遺跡破壊に対処することを目的として、明野村教育委員会により、1992(平成4)年から2003(平成15)年にかけて8次にわたる発掘調査が断続的に行われてきた(佐野 1996・2003・04)。

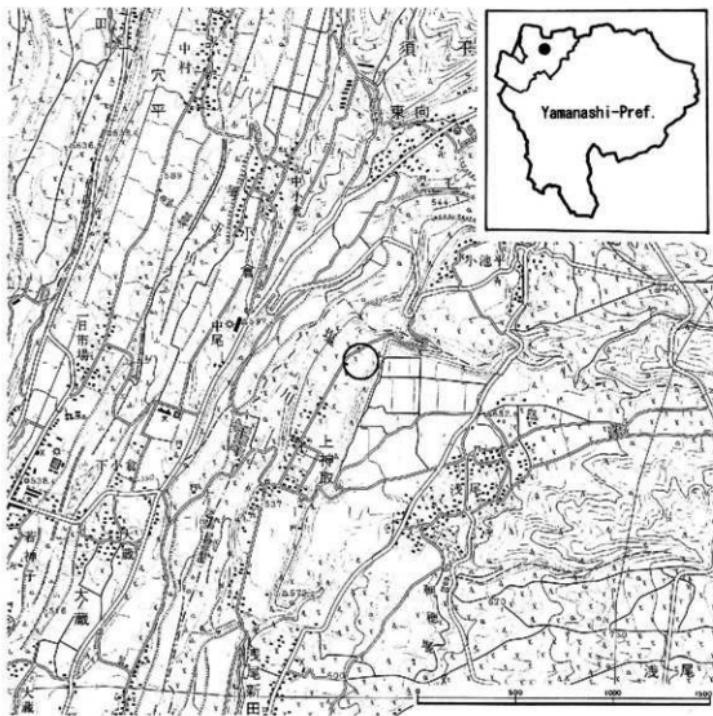


図1 遺跡の位置 1/25,000

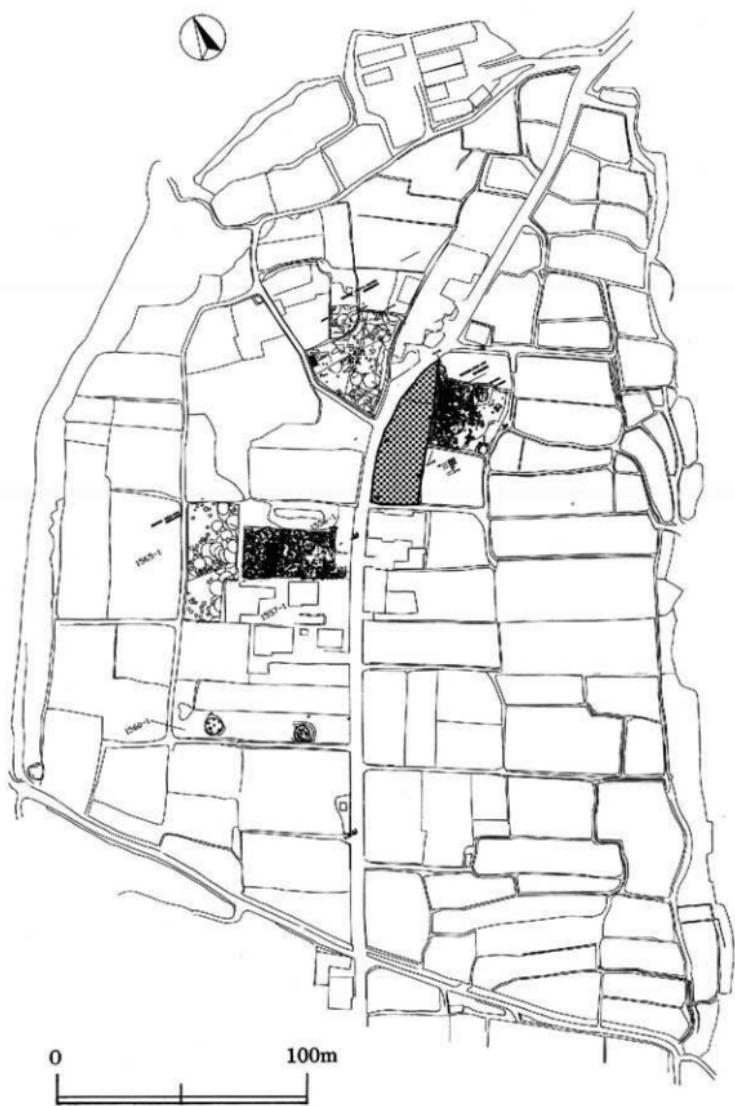


図2 諏訪原遺跡における既往の調査地区と今回の調査地区(網目部分)位置図 1/200

原図は北杜市教育委員会提供

3. 調査経過

発掘調査は、8月5日(日)に現地集合・設営を行い、翌日の6日(月)から調査を開始し、前半組は、8月10日(金)に調査を終了、13日(月)より後半組の参加を得て調査を再開し、17日(金)に終了し、18日(土)現地解散した。発掘は実働10日間である。宿舎は梅之木遺跡の調査からお世話になっている滋賀市穴山温泉能見荘に今夏もお願いした。遺跡と宿舎との往復はマイクロバスのタクシーを利用し、機材等の搬入や連絡用にライトバンのレンタカーを使用した。

発掘前は、桑と雑草が生い茂った荒れ地であったが(写真3)、北杜市教育委員会のご尽力により、桑の伐根ならびに表土層の除去が重機でなされており、すぐに調査に着手することができた(写真4)。調査開始にあたって、市教育委員会が設定した基準杭をもとに、 $5 \times 5\text{ m}$ のグリッドを設定し、東西方向に西からA・B・C··・列、南北方向に北から、1・2・3··・列とし、グリッド名を表すこととした。北半部は、表土除去に伴う排出土の土山が築かれていたので、掘削可能なグリッドは南北方向で6列からとなった。

この発掘区の設定により、グリッド杭を打ち込み、調査開始前の全貌を撮影、現地表面でのコンタуラインを20cm間隔で測量し、調査対象地の北側のC-6・C-7グリッドから調査を開始した。C-6グリッドでは、早くも覆土に丸石を含む多量の礫石を伴う堅穴住居址が検出され、この住居址をSWU-PJ1号住と命名した。また、C-7グリッドでは、堅穴住居址の検出はなかったが、溝状の掘り込みをもつ、固く締まった面が確認され、近世の陶磁器片も出土したことから道状の遺構がグリッドのほぼ真ん中に東西方向に走っていることが確認され、調査を行った。その後、調査の後半に入って、C-6グリッドの西隣のB-7グリッドの調査を着手したところ、北半部に堅穴住居址(SWU-PJ2号住と命名)を検出したほか、土坑状の落ち込みや近世と思われる溝ないし道状遺構を確認した。今回の調査では、C-7グリッドはほぼ調査を終了したが、C-6グリッド検出のSWU-PJ1号住とB-7グリッド検出のSWU-PJ2号住は調査中途で調査期間が終わったため、来年夏に調査を再開する予定である。



写真3 発掘前の現況 2007.6.11

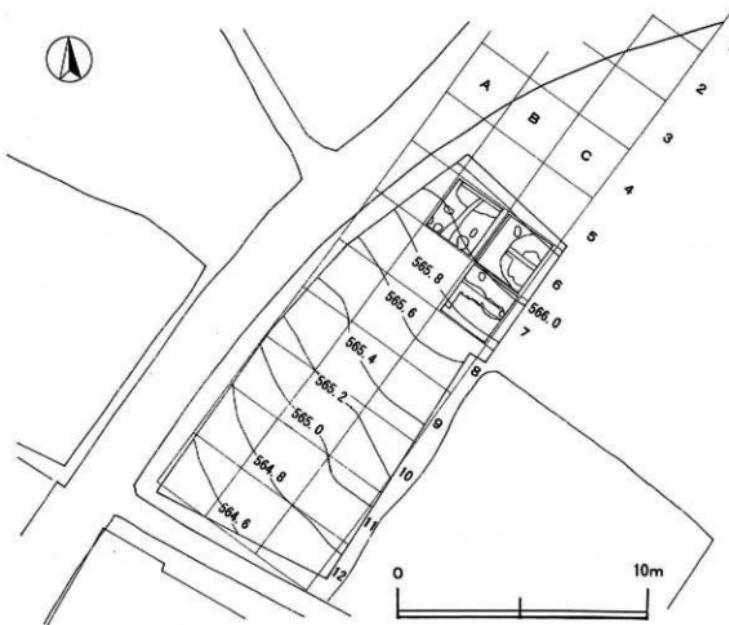


図3 調査地区全体図 1/400



写真4 発掘開始前の全景 2007. 8. 6

4. 発見遺構と遺物

C-6グリッド(図4・写真7~14)

調査区北側から順にグリッドごとに発掘を実施することとしたが、表土除去後の堆土の土山の関係上、C-6グリッドから調査を開始した。重機による表土除去のためか土層は堅緻で、しかも桑の根が多数残存しており、発掘作業に多少難渋したが、表土下、15cm前後で、グリッド北東部を中心に多量の石が検出され始めた。中には、丸石も存在しており、配石遺構の可能性も考えられたため、慎重に掘り下げたところ、図4に示した範囲に円形の落ち込みを確認し、この礫・石は堅穴住居址の覆土に含まれるものと判断された。

この堅穴住居址をSWU-PJ1号住と命名し、全体の遺構確認後、遺構調査を開始した。なお、遺構名に冠した、SWUは昭和女子大学の英文略称である。今後検出される堅穴住居址の番号については、北杜市教育委員会が調査実施してきた住居址番号と区別するため、SWUを冠することとする。

なお、図面では、確認された遺構と思われる落ち込みの範囲は実線で示しているが、発掘したものではないので、あくまで確認段階の状況であることを記しておく。この点は、他のグリッドも同様である。

堅穴住居址はグリッド内の東側に偏して検出され、径約4.8mのほぼ円形を呈する。検出された範囲はおよそプランの1/2と思われる。重複関係は認められないが、東側の未検出部分での重複も考えられる。調査に当たっては、プランほぼ中央部に東西方向にベルトを設定した。前述したように、覆土上層より北東側に偏して、多量の礫・石が認められ、住居廃絶に当たって、覆土中に投げ捨てられたものと思われる。ただ、礫・石中には丸石(写真9・11)を含んでおり、住居廃絶にさいしての儀礼的な行為がうかがえる。覆土上面から床面までの深さは30cm前後であった。

今回の調査期間中には、堅穴住居址の調査を完了することはできず、図4に示したプラン内側のラインの範囲の床面を露出させたにとどまった。来年度に調査を継続する予定であるが、東側の未確認部分(D-6グリッド)については調査範囲の境界近くまで拡張して調査を実施したい。

出土遺物は、グリッド西壁際から、土製の耳栓(写真12・28)が出土したほか、住居址覆土中から黒曜石製石礫や土器が出土した(写真9・10・13・23~25・27)。出土土器は、勝板式~曾利式土器を含み、堅穴住居址の時期の確定には至らなかった。来年度の調査によって明らかにしたい。



写真5 発掘風景 C-6・7グリッド



写真6 発掘風景

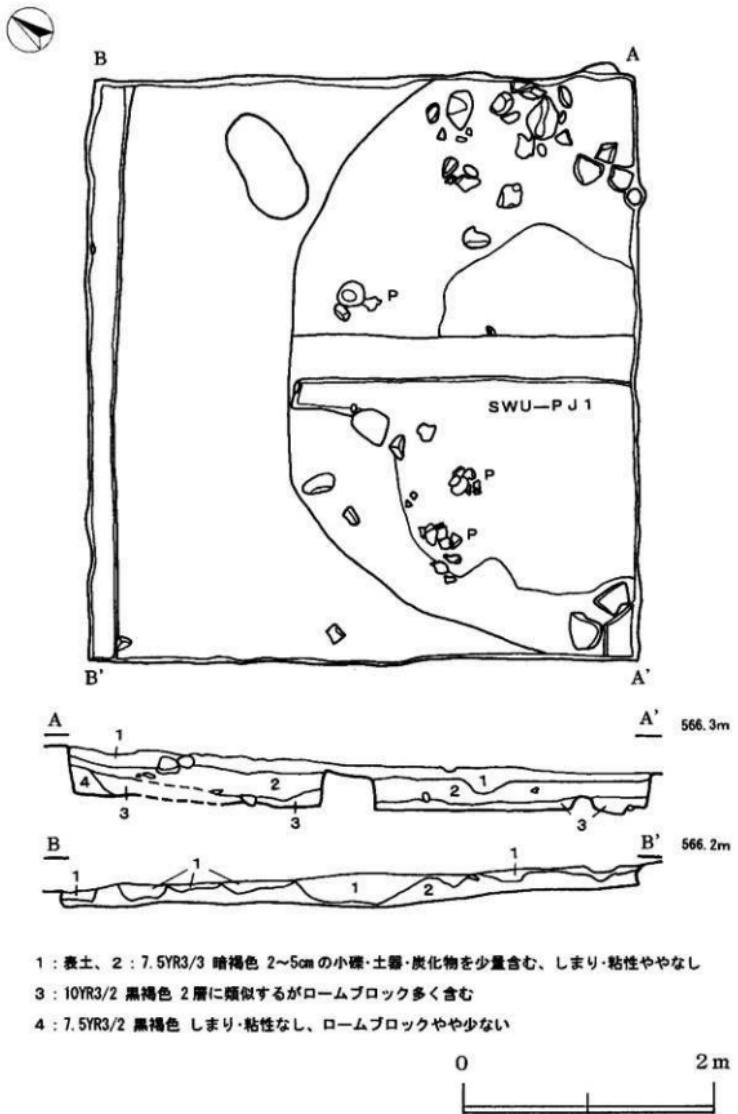


図4 C-6グリッド 平・断面図 1/40



写真7 C-6・7グリッド遺構検出状態



写真8 C-6グリッド検出 SWU-PJ1号住



写真9 SWU-PJ1号住 丸石・遺物出土状態



写真10 SWU-PJ1号住 遺物出土状態

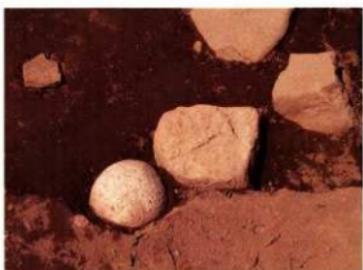


写真11 SWU-PJ1号住 丸石出土状態



写真12 C-6グリッド 耳絵出土状態



写真13 SWU-PJ1号住 遺物出土状態



写真14 SWU-PJ1号住

C-7グリッド(図5・写真15~19)

C-6グリッドの南側に設定したグリッドである。桑の根の残存が著しく、擾乱土壌が多く、縄文中期の遺構はほとんど確認されなかった。グリッドの中央には東西方向に走る溝状の落ち込みが確認され、内部には大形の石も出土した。この落ち込みを覆う土層は、石や小石、ロームブロックを含む混合土層で、堅く締まっており、当初は擾乱土層と考えていたが、北杜市教育委員会の佐野 隆さんより、近世に属する道路状遺構である可能性が強いとの指摘を受けた。このグリッドからは少量ではあるが陶磁器片も出土していることから、その時期のものと思われる。

全体として、この道路状遺構により縄文時代の遺構は破壊された可能性があり、遺物の出土量は少なかつたが、中期終末段階の大形破片(写真18・26)も出土している。また、やや大形の黒曜石の塊も出土している。このグリッドの調査はほぼ終了したが、北側に土坑状の落ち込みが確認され、未調査であるので、来年度に調査を行う予定である。



写真15 C-7グリッド 遺構検出状況



写真16 C-7グリッド 道状遺構

B-6グリッド(図6・写真20~22)

調査の後半に入って、C-6グリッドの西側に設定したグリッドの調査を開始した。このグリッドも表面は堅く締まっており、桑の根の残存も多かったが、20cmほど掘り下げたところ、遺構の確認ができた。北側には堅穴住居址と思われる円形の落ち込みがあり、それを切るように、南北方向に走る溝、もしくは道路状の遺構や、南側では、土坑状の落ち込みがいくつか確認できた。

このグリッドから検出された堅穴住居址をSWU-PJ2号住と命名した。今年度はグリッド北側にサブトレーンチを設定し、床面までの深さを確認したところ、およそ20cm前後で床面をとらえることができた。比較的浅い掘り込みであった。プランは円形を呈し、C-6グリッド内には検出されなかったことから、両グリッドの境界に設定したベルト内におさまるものと思われる。推定で径約4.5mほどの大きさをもつ堅穴住居址と思われる。サブトレ内からは中期の土器破片が出土しているが、正確な時期は不明である。来年度の調査によって明らかにしたい。確認された範囲はプランの1/2以下であるので、北側に拡張して調査を実施したいが、東側の耕作地への通路となっている関係もあり、大幅な拡張は難しいものと思われる。

出土遺物は、遺構確認面までの調査にとどまったため、少なかったが、黒色安山岩製の石礫(写真28)が表土層中から出土している。

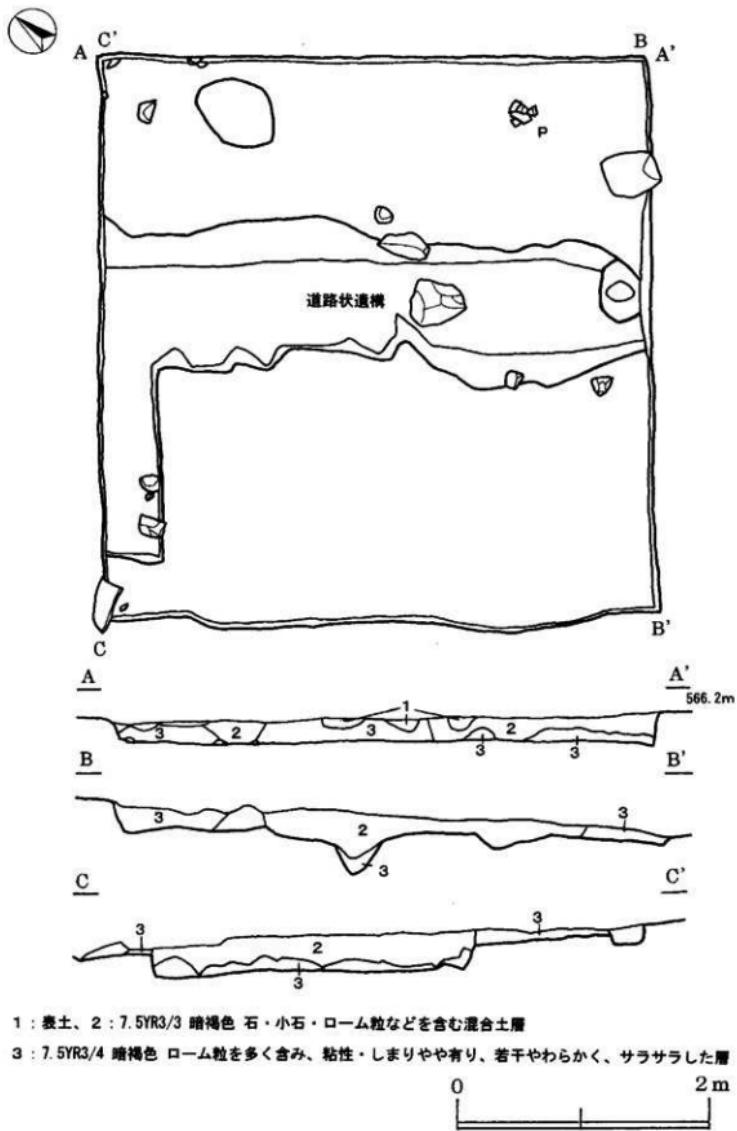
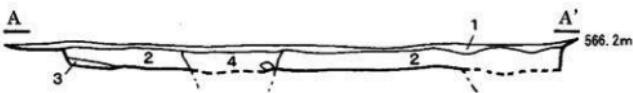
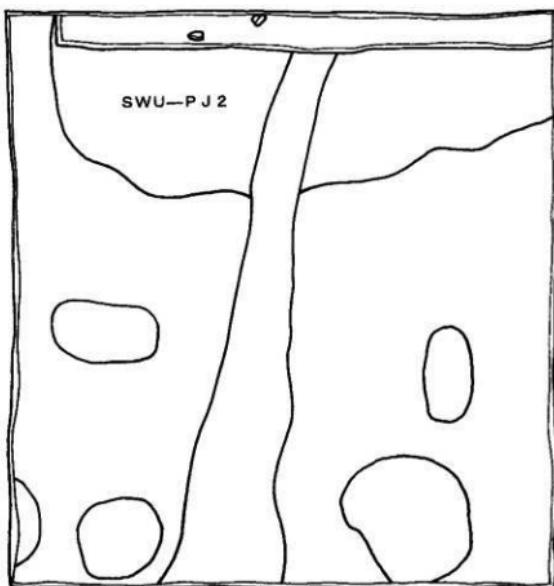


図5 C-7グリッド 平・断面図 1/10



A

A'



- 1 : 泥土、2 : 7.5YR3/3 暗褐色 粘性ややなし しまりなし ローム粒・炭化物・土器・礫を含む住居覆土層
3 : 7.5YR3/4 暗褐色 粘性なし しまりやや有り ローム粒やや少ない・炭化物・土器・礫を含む住居覆土層
4 : 10YR2/3 黒褐色 粘性ややなし しまりやや有り ローム粒少ない・炭化物・礫を含む

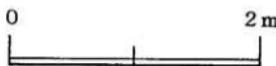


図6 B-6グリッド 平・断面図 1/40



写真17 C-6・7グリッド



写真18 C-7グリッド遺物出土状態



写真19 C-7グリッド発掘風景



写真20 B-6・C-6グリッド



写真21 B-6グリッド遺構確認面



写真22 B-6グリッド SWU-PJ2号住

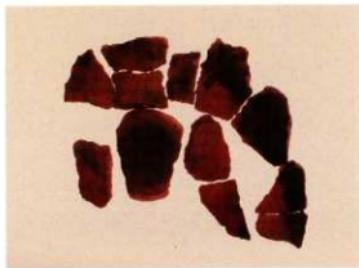


写真23 C-6 グリッド
SWU-PJ1号住出土遺物

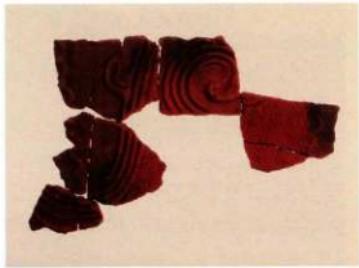


写真24 C-6 グリッド
SWU-PJ1号住出土遺物



写真25 C-6 グリッド
SWU-PJ1号住出土遺物

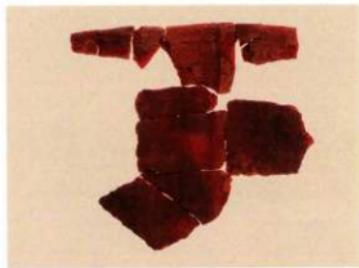


写真26 C-7 グリッド 出土遺物

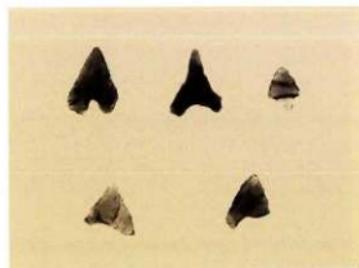


写真27 出土石器(石縫)

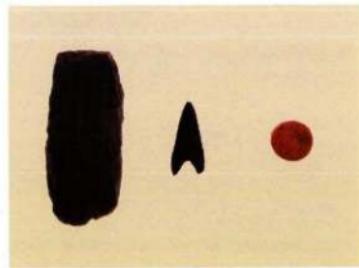


写真28 出土遺物(打製石斧・石縫・土製耳栓)

5. まとめ

2007年より開始された諏訪原遺跡の発掘調査は、調査期間が短かったにもかかわらず多大な成果をあげることができた。諏訪原遺跡はこれまでの北杜市教育委員会(旧・明野村教育委員会)の8次にわたる発掘調査により、大規模な中期環状集落址であることが明らかにされてきた。規模的には、昨年度まで調査に参加させていただいた北杜市明野町梅之木遺跡よりも大きな集落址の可能性が考えられる。幸い、今回の調査では早くも堅穴住居址を2軒検出することができ、新たに環状集落の一角を明らかにすることができた。

北杜市教育委員会の指導により今回調査対象箇所となった地区は、約700m²であり、環状集落の北側部分から、中央広場を含むエリアと考えられる。調査はまだ着手したばかりであり、調査中途で調査期限となってしまったが、来年度以降の継続的調査に大きな指針を得ることができた。今後は、検出された遺構の時期を明確にさせ、諏訪原遺跡の中期環状集落址の特性を明らかにさせていきたいと考えている。

私立女子大学のなかで、昭和女子大学歴史文化学科は、歴史文化系の幅広い分野を学ぶ学科という特徴を有している。とくに「手で考え、足で見る」をモットーにして、実習授業の充実を図っているが、この諏訪原遺跡の発掘もまた、その実践的教育の一環として位置づけられる。この調査は、文部科学省に申請した「平成19年度私立大学経常費補助金特別補助」にかかる「教育・学習方法等改善支援」に申請し、採択された研究課題「繩文時代における環状集落址形成過程の研究」(申請者 山本暉久)の補助金により実施された。まさに、発掘体験を通して、歴史を学ぶという得難い教育の場ともなっているのである。今後とも、このような機会をとらえて実践的な教育を進めるとともに、繩文時代における環状集落址形成過程の解明という研究課題も同時に推し進めなければなるまい。

今回の調査にあたっては、多くの方々から暖かいご指導・助言を賜った。とりわけ、山梨県教育委員会ならびに北杜市教育委員会には、多大なご援助をいただいた。記して、感謝申し上げる次第である。また、調査にあたっては、土地所有者である村田勝海さんにご承諾をいただいたほか、調査開始前までに、桑の伐根や表土除去を北杜市教育委員会のご好意により実施していただき、円滑な調査を実施することができた。ご尽力いただいた北杜市教育委員会の佐野 隆さんに篤くお礼申し上げる次第である。

最後に、藤巣の中、調査に参加し苦労を共にした学生たちに感謝して、本調査概要報告の結びとしたい。



写真29 諏訪原遺跡 小・中学生発掘体験 07.8.11



写真30 遺跡の埋め戻し作業風景

調査参加者名簿

教員 山本暉久(大学院生活機構研究科教授)・小泉玲子(人間文化学部歴史文化学科准教授)
助手 石井寛子(人間文化学部歴史文化学科)
大学院生 吉田泰子(生活機構研究科生活文化研究専攻修士2年)・石川真理子(生活機構研究科生活文化研究専攻修士1年)・岩井良栄(生活機構研究科生活文化研究専攻修士1年)・大塚泰穂(生活機構研究科生活文化研究専攻修士1年)・大野節子(生活機構研究科生活文化研究専攻修士1年)
歴史文化学科
学部生 4年 根本 薫
3年 上田恵里・小川 緑・武井恵由美・垣通都香・狩野 彩・木谷由起・鈴木歩未
相馬千明・長崎佑香・諸井美香
2年 関さなめ・井口真理子・鎌田夏美・高野 舞・松木小枝・吉田沙織
1年 新井恵理子・板橋麻衣・遠藤文香・清水山佳・松原孝子
卒業生 藤井恵(長野県千曲市役所)・領家玲美(相模原市埋蔵文化財調査員・大学院生活機構研究科生活機構学専攻博士課程1年)・多崎美沙(相模原市埋蔵文化財調査員)・半田素子(世田谷区遺跡調査会補助員)・江川真澄(かながわ考古学財団調査補助員)・早勢加菜(山梨県上野原市教育委員会)



写真31 前半参加者記念写真



写真32 後半参加者記念写真

諏訪原遺跡関連文献

- 佐野 隆 1996 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『年報－平成7年度－』 北巨摩郡市町村文化財担当者会
佐野 隆 2003 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古－平成14年度年報－』 北巨摩郡市町村文化財
担当者会
佐野 隆 2004 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古－平成15年度年報－』 北巨摩郡市町村文化財
担当者会

報告書抄録

ふりがな	やまなしけんぼくとしあけのまちかみかんどり すわはらいせきはつくつちょうさがいほう						
書名	山梨県北杜市明野町上神取 調訪原遺跡発掘調査概報 2007年度						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	山本雄久・小泉玲子						
編集機関	昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科						
所在地	〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7 昭和女子大学 TEL. 03-3411-7059						
発行年月日	西暦 2007年12月15日						
ふりがな 所収遺跡 所在地	ふりがな 市町村 遺跡番号	コード 01-014	北緯 35度 48分 2秒	東経 138度 26分 37秒	調査期間 20070806 ~200708 17	調査面積 75m ²	調査原因 縄文時代環状集落形成過程の研究にかかる 学术調査
すわはらいせ き 調訪原遺跡	やまなしけん ぼくとしあけ のまちかみか んどり 155 8-1	19-209					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
調訪原遺跡	集落址	縄文時代 近世	堅穴住居址2、土坑 道状遺構ほか	縄文土器・土製品 石器 近世陶磁器	縄文時代中期の大規模環状集落址で、2007年度より、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科が調査主体となって、中期環状集落形成過程解明のため、学术発掘調査を開始した。2007年度の調査では、縄文時代中期の堅穴住居址2軒をはじめ、ピクト・土坑ならびに近世と思われる道状遺構を検出し、一部の調査を実施した。来年度も継続して調査の予定である。		



明野ひまわり畑にて 2007.8.11

山梨県北杜市明野町上神取
諏訪原遺跡発掘調査概報
2007年度

発行日 2007年12月15日

発行者 昭和女子大学人間文化学部
歴史文化学科

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7

Tel 03-3411-5373

FAX 03-3411-7059